

2. 聖書と文学

1. 文学の宗教性 宗教の文学性

宗教と文学は本来密接に関わり合っていた。宗教的文献自体が豊かな文学性を持っている。

黒人霊歌 ブルース (ジェイムズ・H・コーン 『黒人霊歌とブルース
アメリカ黒人の信仰と神学』 新教出版社)

2. 近代日本文学に対する欧米文学の影響、そして欧米文学を規定する聖書

国民文学の成立と聖書の近代語訳

「聖書のみ」:

近代語への翻訳、印刷技術、識字率・初等教育、
聖書普及の組織体制(世界聖書協会)

3. 聖書の文学性

聖書の文学表現(ジャンル)の多様性

神話・伝説物語

歴史文学(歴史書)

法・規定

詩(韻文)

4. 神の人称の多様性、(預言書・一人称、詩編・二人称、歴史書・三人称)

文学表現の形式は、神思想などの思想内容と不可分である。

文学形式の多様性は、思想の多様性に相関する。

5. レトリックの再評価 「イエスの譬え」

譬えは、拡張されたメタファー(隠喩)

宗教的メッセージの伝達にとって、表現の文学性は密接な関わりがある。レトリックは単なる飾りではない。読者・相手の思考方法(生き方)を逆転させる。世界と自分についての新しい見方を鮮やかに提示し、相手をそこに巻き込んでしまう。

<善きサマリア人>

10:25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28 イエスは言われた。「正し

い答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」²⁹ しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。³⁰ イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。³¹ ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。³² 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。³³ ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、³⁴ 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。³⁵ そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』³⁶ さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」³⁷ 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

6．近代日本文学と聖書

(1)キリスト教徒ではないが、聖書は読む

近代日本の知識人、文学者には、一方で、キリスト教・教会嫌いを述べつつも、聖書には決定的な影響を受けている者が少なくない。それは、近代人として西欧近代を受容することは、その基盤にあるキリスト教への一定の関係を避けて通れないことを意味するように思われる。

(2)太宰治

「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はつきりと二分されてゐる」(「HUMAN LOST」 1937.4)

太宰と聖書の関わりは、1935年、内村鑑三の著作からの影響による。当時、太宰は東京武蔵野病院(精神病院、鎮静剤パピナル注射の習慣化の根本治療のため、井伏鱒二らにサナトリウムと偽られて入院させられた)に入院しており、もっとも信頼していた人に裏切られたとの思いの中で、聖書を読み始めた。太宰はキリストと自分を重ね合わせて聖書を読んだ。

「十字架のキリスト、天を仰いでゐなかつた。たしかに。地に満つ人のむれを、うらめしそうに、見おろしてゐた。」

キリストを孤独と苦悩において共感する相手を見ていた。聖書の日本文学史上の意義とは、日本文学において自分の文学を強烈に自負する太宰自身の「自分の文学」としての意義を意味すると言えよう。こうして捉えられたキリストは弱い卑屈なキリストであり、それはまず太宰の自分自身の弱さの肯定へとつながった。

「私は前にも云ったやうに、弱い性格なのでその弱さといふものだけは認めなければならぬと思つてゐるのです。また人と議論することも私にはできない。これも自分の弱さといつてもいいけれども、何か自分のキリスト主義みたいなものも多少含まれているやうな気がするのです。」(「文学の眩野に」1947.11)

しかし、この弱いキリストとの共感、今回の入院に際して自分を裏切った人々への愛・赦しへとつながってゆく。なぜなら、聖書のキリストは十字架上で、最後に自分を十字架につけた人々を赦して息を引き取ったからである。実際、「HUMAN LOST」は最後に、マタイ福音書 5.43-48 の引用で閉じられているのである。

7. マタイ福音書

5:43 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。44 しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45 あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。46 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるうか。徴税人でも、同じことをしてはいないか。47 自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるうか。異邦人でさえ、同じことをしてはいないか。48 だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

<文献>

1. 鈴木範久監修 『聖書と日本人』(大明堂)
2. 佐藤泰正編 『文学における宗教』(笠間書院)
3. 関根正雄 『旧約聖書文学史 上下』(岩波書店)
4. ノーマン・ペリン 『新約聖書解釈における象徴と隠喩』(教文館)
5. ウィリアム・A・ピアズリー 『新約聖書と文学批評』(ヨルダン社)
6. リクール 『生きた隠喩』(岩波書店)
7. 大貫隆 『福音書と伝記文学』(岩波書店)